文化

新潟市の「安吾賞」を受賞した日本文学研究者、ドナルド・キーン米コロンビア大名誉教授(89)が今月末、日本永住のため米国をたつ。本県を舞台にした人形浄瑠璃の上演などを通じ、交流を重ねてきた新潟市西蒲区の三味線奏者、上原誠己さん(芸名・越後角太夫)(61)に、日本永住に向け、準備を進めるキーン氏の表情を寄稿してもらった。

## 日本永住直前 キーン氏を訪ねて

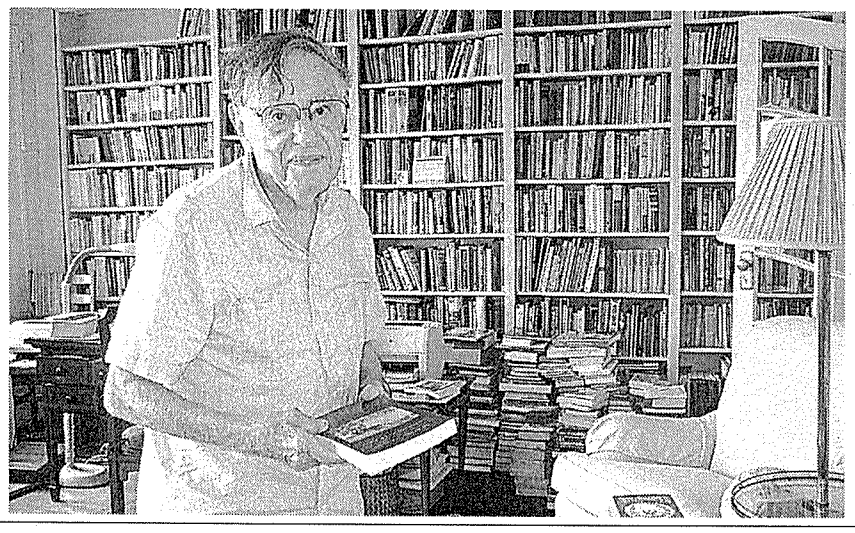
# 「被災者励ましたい」

### 三味線奏者・上原誠己さん(新潟市)

## 来月、中尊寺訪問を計画

今月上旬、日本への引っ越し準備などで多忙なドナルド・キーン先生を、ニューヨークのご自宅に訪ねる機会があった。

お付き合いのきっかけは、5年前。長年研究してきた浄瑠璃について教えを請うため、東京の駒込駅に近いお宅を訪問した。以来、恩師として仰いでいる。



米ニューヨークの自宅で引っ越しの準備をするキーン氏(8月7日、筆者撮影)

うえはら・せいき　新潟市出身。東京外大卒。国立劇場文楽第1期生。1972年～97年、人形浄瑠璃・文楽座の三味線弾きを務める。現在は県内で演奏活動などを行っている。

越後猿八座で一昨年、復活初演した古浄瑠璃「弘知法印御伝記」の上演は先生のご提案によるもの。新潟の貴重な文化の再発見となった。

「日本に永住し日本国籍を取得する」という先生の決意は、大震災で多大な打撃を蒙った日本に、大きな希望と感動を与えた。これは研究者としてこられた先生の、限りない愛情の証しにほかならない。

米国にお訪ねした時、先生は書籍や書簡の整理をしておられた。その内容は、日本文学や文化を海外に紹介してきた歴史そのものだ。谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫の署名入り書籍は、文豪たちとの深い交流の足跡でもあるのだろう。

東日本大震災については「映像をテレビで見たが、とても恐ろしかった」と話された。先生は「奥の細道」を訪ね、東北の風土に触れたことがある。「被害の大きさを思うと訪ねるのはつらいが、被災地の方々を励ましたい」ともいわれた。9月には、中尊寺を訪問される予定だ。

印象的だったのが、原発事故に対する言及である。先生は戦争の悲惨さを、海軍の日本語将校として戦場で身をもって体験されている。「先祖代々、受け継いできた美しい国土を守るには、原発をなくすのが一番」と、いっておられた。私たちはこの言葉を重く受け止めるべきだと思う。

ご自宅から歩いて約10分のところに、南北戦争の英雄的将軍、第18代大統領グラントの墓地があった。先生が名著「明治天皇」で、ペーを、乗り継ぐ先生は、89歳とジを費やしている人物は思えない元気さだった。オペラを、メトロポでもある。リタン歌劇場でご一緒させていただいたのは、一番の思い出だ。日本永住後も、好きな研究に専念していただきたいと願う。

「明治12年に来日した際、当時26歳の明治天皇に謁見し『外国から金を借りてはいけない』などの忠告をした」「実は酒乱だった」―。豊富な逸話を面白く語ってくださった。